

大磯小学校遺跡の思い出

鈴木 一 男

最初から私事で申し訳ないが、私は大磯で生まれ、高校まで大磯で過し、東京の大学で考古学を専攻した。当時は、主に千葉県や茨城県を中心に発掘調査をしていた。だから、地元である大磯町の先人達の歴史については全くの素人で、どこに、どのような遺跡があるのかなどは、ほとんどわからなかった。

そんな私が、初めて大磯町の発掘調査に参加したのが大磯小学校遺跡である。忘れもしない昭和49年8月下旬のことである。元教育長の池田彦三郎先生より電話があり、是非調査に参加してほしいと言われ、急遽、茨城県牛久町より我が家へと帰ったのである。初めて調査ができる喜びと、何が出るかわからない不安とが入り混じった複雑な気持ちであったことを覚えている。しかし、何よりも、郷土の歴史の大家である池田先生と一緒に発掘調査ができるという喜びで、不安めいたものはすぐに消えてしまっていたのである。

調査当日、関係者が集まり簡単な説明があった。集まった人達は、私の知らない人達ばかりであったが、現国府中学校教頭の飯田善雄先生、現大磯町教育委員会主幹の大沢武久先生、大磯小学校の河合剛英先生などの顔があったことを記憶している。

調査が開始されて、私はびっくりしてしまったのである。というのも、若干の発掘器材がある他、測量器材がほとんどなかったからである。こういう調査もあるのかと思ったが、正直、10年遅れていると感じた。

重機により十字状にトレンチを掘り進むが、一向に遺物が出土しない。池田先生は「まあ鈴木君、そのうちいやというほど出るから安心なさい」と落ち着いた口調でおっしゃっ

たことを記憶している。果して、地表下約1.7メートルの所から多量の土器が出土した。私は、ホッと安心した反面、これは大変だと思った。土器とともに石が並んで顔をのぞかせていたのである。これがいわゆる配石遺構であることは直感でわかったが、本での知識しかなく、掘るのは初めてのことなので、私は非常に緊張してしまったのである。池田先生は、出て当然といった顔で、黙々と調査をしていた。飯田先生はじめ各先生方も生徒を指導して、テキパキと調査を進めていた。それこそ全員一致協力して調査をしたわけである。

調査は順調であったが、台風14号・16号の来襲で、トレンチ内には相当量の水が溜まってしまったのである。更に、どういうわけか台風が去った後もその水が引かないのである。私は苛立つ気持ちを抑えるのが精一杯であったが、池田先生は、いつでも、どんな時でも冷静かつ沈着で、次から次へと手段を講じて調査を遂行したのである。

調査が終了した8月31日（土）、旧役場（現大磯町立図書館）で反省会が開かれた。席上、今後の処理について話がもたれ、私と同

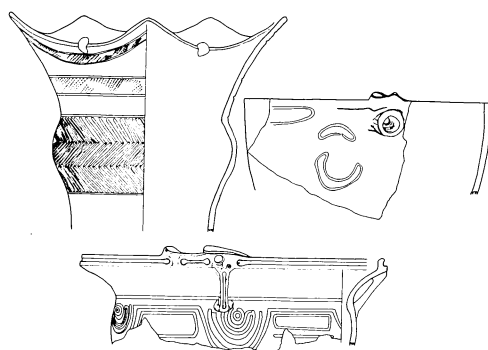


（配石遺構）

級生の田口君（現大磯町役場）の両名で整理することになったのである。

しかし、約束はしたものの、私も卒業論文などで忙しく、整理作業は一向に進展しなかったが、それでも、まとめてみようという気持ちも強く、池田先生の勧めもあって、昭和51年1月より整理を開始し、ついに同年3月に大磯町埋蔵文化財調査報告書第1集として刊行するに至ったのである。本文64ページ、図版29ページのこの本には、先にも述べたように、悪条件のもとで黙々と調査を行った各先生方はじめ、多くの方々の努力の結晶が集約されているのである。

その後、私は縁あって大磯町教育委員会に入り、現在に至っているわけであるが、この10年間というもの、大磯小学校遺跡とはほとんど無縁に近かった。しかし、校舎の改築が計画され、昭和59年と60年に再びこの遺跡を調査する機会にめぐり合うことができた。こ



（出土土器実測図）

れも何かの縁だと思う。

調査の結果については、現在、整理を進めているが、昭和60年10月9日付けの朝日新聞にも取り上げられたように、非常に貴重な遺物が出土しているわけである。今後、あと2～3年は大磯小学校遺跡とつきあう予定である。おそらく、報告書はその先のことになるだろうが、私は、自分の青春の1ページであるこの遺跡を最後まで見守ってやりたいと思うのである。（社会教育課・学芸員）

***** 研究ノートから *****

明治19・20年の大磯南本町消防団

豊田由登家より寄贈された古文書のなかに、明治19・20年の「消防規則連印帳」があります。これは、大磯南本町が作った消防団の規則書です。これによると、いざ火事の時、団員は自身番所前に集合し、総代人や世話人の指揮のもと火事場へ急行します。火事場では他町団員との争いは禁示され、消火後の振舞い酒も受け取ってはならないとされています。

また、右表は消防団の構成を示したものですが、これによると、雲龍水掛や玄番桶掛、鳶掛などが役割にあることから、当時の消火は、雲龍水（龍吐水）や玄番桶といった人力による消火と、鳶口による破壊消防が主力であったことがわかります。

役 名	人 数	
	明治19年	明治20年
纏持	2	2
梯子持	3	4
鳶掛	10	9
火之番所跡詰	3	2
雲龍水掛	7 ^{うち 会社1}	4 ^{うち 会社2}
玄番桶掛	9 ^{うち 会社1}	5
標燈掛	1	1
弁当掛	2	2
梯子世話掛	5	1
纏世話掛		1
鳶世話掛		1
雲龍水世話掛		5
玄番世話掛		4
取締役		3